

日本とスウェーデンの援助規範意識比較に関する研究

— 福祉政策に影響する両国の援助規範意識の特性に着目して —

A comparative study of normative attitude toward helping in Japan and Sweden

— Focus on the influence on social welfare policy of the characteristics of the
normative attitude toward helping in the two countries —

星野 晴彦^{*}・大塚 明子^{**}・秋山美栄子^{***}・森 恭子^{****}

Haruhiko HOSHINO, Akiko OTSUKA, Mieko AKIYAMA, Kyoko MORI

要旨：本稿は、日本とスウェーデンの福祉政策の前提となる国民の意識について比較調査を行なった結果を示す。調査では、以下のことが示唆された。日本人回答者の回答傾向は、人からの世話を受けたことへの返済に力を注ぎ、しかし他者に委ねることは良くないと、柔軟性に乏しく考える傾向がある。そして不特定多数の人への救済はスウェーデンより低くなる、というものである。他方でスウェーデン人回答者の回答傾向は、不特定多数の人への博愛性が強く、また相手の好意は、淡々と返そうとする。そして他者に安易に甘えてはいけな思考えつつも、本当に自分たちが困っているのであれば他者に援助を委ねることも許容するという柔軟性が認められる。そして、援助する者、される者の関係の対等性を重視する。加えて援助によるメリットがあることも否定しない、というものである。

法制度や政策は皮相的に捉えるのではなく、国民の意識構造を認識して有機的に検討していくことが必要となろう。決して日本人回答者では援助をする意識が無いわけではなく、意識の構造が異なるのではないか。ただし、その意識構造の差異を認識することがきわめて重要な出発点となると考えられる。

^{*} ほしの はるひこ 文教大学人間科学部

^{**} おおつか あきこ 文教大学人間科学部

^{***} あきやま みえこ 文教大学人間科学部

^{****} もり きょうこ 文教大学人間科学部

I はじめに

1990年にデンマークの社会学者エスピ＝アンデルセンが提起した福祉レジーム論¹は、福祉国家研究で極めて参考になるものとされている。疾病などの理由で労働市場を離脱した人が生活を維持できるか否かの指標となる脱商品化という指標であり、西側先進諸国を分析して、自由主義的福祉国家（アメリカ合衆国など）、保守主義的福祉国家（大陸ヨーロッパ）、社会民主主義的福祉国家（北欧）の3類型を析出し、福祉国家の発展は一つではないと論じた。政府の大きさ、すなわち社会的支出のGDPに占める割合が当然社会民主主義的福祉国家では高くなり、自由主義的福祉国家では低くなる。社会民主主義的福祉国家は所得平等および雇用拡大を目的としており、その財源の多くは税により賄われている。埋橋²は、日本は社会保険制度が職業的に分立している点や伝統的家族機能が強固である点などが保守主義的性格を持ち、他方社会保障支出がGDPに占める割合が小さい点などで自由主義的性格を兼ね備えている、としている。言ってみれば、日本は単純に競争原理に基づく自由主義的な福祉国家とは言い切れない。自由競争主義とは異なる、もっと別の意識的要素も含まれているということである。他方で別の視点として、欧米先進国とは異なるレジームとして、家族主義的福祉レジームに位置付ける者³もいる。これは、南欧＝東アジアモデルとも言われ、イタリアを代表的とし、ほかにスペイン、ポルトガル、ギリシャ、日本、大韓民国、台湾がある。福祉施策は貧弱で福祉ビジネスも未発達なため、高齢者、失業、子育てなどについて家族が責任を持つべきであるとする家族主義が特徴とされている。

日本が将来どのような社会になるべきかを日本人に問うて、58.4%が「北欧のような福祉を重視した社会」と答える。しかし、政府予算の削減を同時に求める⁴。現実的に政策的には税の負担を増やすことも必要とされながらも、税金を上げるとなると選挙で国民の理解が得られないとして、政治家が躊躇しているというのも現実である。以上のような福祉に対する国家の取り組みを議論するには、政策を支える国民の意識とは何なのかを、明確にしていく必要がある。果たして支援を必要とする人々に対する援助に関する国民の理解とは何なのか。北欧と比較してどう異なるのか。それを国民の意識のあり方や構造から明らかにしたい、ということが本稿の目的である。

II 方 法

(1) 調査対象

個人主義や集団の意識を国際的に比較する実証研究は、これまで多くなされてきたが、その大多数は大学生を対象としたものであり、当該社会や文化に対する代表性という点では疑問の余地がある。そこで本稿の調査では大学生・教員・福祉施設職員という三つのグループを調査対象として設定することとした。まず、2010年3月ストックホルムとその周辺で質問紙調査を行った。学生に対しては教室に訪問して、その場で記入してもらった。教員と福祉施設職員に対しては留め置き法による。次に同年6月から7月にかけて日本で、東京近郊のB大学学生、福祉施設職員、教員に対して同じ質問紙調査を行った。回答者の内訳は表1に示す通りであり、またその年齢構成は表2に示す通りである。

表 1 回答者の内訳

() 内は%

		男 性	女 性	計
日 本	学 生	34 (26.4%)	95 (73.6%)	129 (100.0%)
	教 員	52 (32.1%)	110 (67.9%)	162 (100.0%)
	福祉施設職員	17 (20.2%)	67 (79.8%)	84 (100.0%)
	計	103 (27.5%)	272 (72.5%)	375 (100.0%)
スウェーデン	学 生	33 (27.5%)	87 (72.5%)	120 (100.0%)
	教 員	49 (47.1%)	55 (52.9%)	104 (100.0%)
	福祉施設職員	6 (10.2%)	53 (89.8%)	59 (100.0%)
	計	88 (31.1%)	195 (68.9%)	283 (100.0%)

表 2 調査対象者の年齢構成

		10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	計
日 本	学 生	77 (59.7%)	52 (40.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	129 (100.0%)
	教 員	0 (0.0%)	0 (0.0%)	37 (23.0%)	48 (29.8%)	76 (47.2%)	0 (0.0%)	161 (100.0%)
	福祉施設職員	5 (6.0%)	9 (10.8%)	9 (10.8%)	30 (36.1%)	17 (20.5%)	13 (15.7%)	83 (100.0%)
	計	82 (22.0%)	61 (16.4%)	46 (12.3%)	78 (20.9%)	93 (24.9%)	13 (3.5%)	373 (100.0%)
スウェーデン	学 生	5 (4.2%)	67 (56.3%)	35 (29.4%)	12 (10.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	119 (100.0%)
	教 員	0 (0.0%)	5 (5.2%)	25 (25.8%)	18 (18.6%)	27 (27.8%)	22 (22.7%)	97 (100.0%)
	福祉施設職員	0 (0.0%)	5 (9.1%)	6 (10.9%)	16 (29.1%)	19 (34.5%)	9 (16.4%)	55 (100.0%)
	計	5 (1.8%)	77 (28.4%)	66 (24.4%)	46 (17.0%)	46 (17.0%)	31 (11.4%)	271 (100.0%)

(2) 調査項目

表 3 に示したとおり、箱井たちの作成した調査票 29 項目を用いた。これは、援助に関する規範意識項目にどの程度賛成するかを「非常に賛成する」(5 点) から「非常に反対する」「1 点」までの五段階で評定するように対象者に求めた。質問によって、その趣旨により逆転項目が含まれている。なお、() 内は箱井⁵ たちが行った調査で因子分析を行なった結果分類された、返済規範意識・自己犠牲規範意識・交換規範意識・弱者救済規範意識のいずれに該当したかを示している。調査時にはこれらを示すとはなかったが、本稿では後の議論の参考のために示しておく。

表3 質問項目

1. 自分に好意を示してくれたからといって、自分も好意を示してお返しをする必要はない。(返済)
2. 救う能力が自分に備わっていない時には、救う努力をしても無駄である。(自己犠牲)
3. 人が困っている時には、自分がどんな状況にあらうとも、助けるべきである。(自己犠牲)
4. 自分の利益よりも相手の利益を優先して、手助けすべきである。(自己犠牲)
5. 人から何かを贈られたら、同じだけお返しをすべきである。(返済)
6. 自己を犠牲にしてまでも、人を助ける必要はない。(自己犠牲)
7. 過去において私を助けてくれた人には、一生感謝の念を持ち続けるべきである。(返済)
8. しいたげられている人を、まず救うべきだ。(弱者救済)
9. 人を助ける場合、相手からの感謝や返礼を期待してもよい。(交換)
10. 恩人が困っている時には、自分に何があろうと助けるべきである。(返済)
11. 人にかけての迷惑は、いかなる犠牲を払って償うべきである。(返済)
12. 不当な立場で苦しんでいる人は、少しでも助けるべきだ。(弱者救済)
13. 以前、私を助けてくれた人には、特に親切にすべきである。(返済)
14. 人の好意には甘えてもよい。(交換)
15. 犯した罪を償わなくてもよい場合がある。(交換)
16. 人が、私を助けるために何らかの損害を被っているなら、そのことに対し責任を持つべきである。(返済)
17. 将来付き合うことのない人なら、困っていても助ける必要はない。(自己犠牲)
18. 大勢の人が同じ状況で困っている場合、まず以前私を助けてくれたことのある人を1番最初に助けるべきである。(自己犠牲)
19. 困っている人に、自分の持ち物を与えることは当然のことである。(弱者救済)
20. どんな場合でも、人に迷惑をかけてはいけない。(交換)
21. 私を頼りにしている人には、親切であるべきだ。(弱者救済)
22. 自分が不利になるのなら、困っている人を助けなくともよい。(自己犠牲)
23. 社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである。(自己犠牲)
24. 社会の利益よりも、自分の利益を第1に考えるべきである。(自己犠牲)
25. 見返りを期待した援助など、全く価値がない。(交換)
26. 受けた恩は必ずしも返さなくてもよい。(返済)
27. 自分より悪い境遇の人に与えるのは当然のことである。(弱者救済)
28. 人は自分を助けてくれた人を傷つけるべきではない。(弱者救済)
29. 相手がお返しを期待していないのなら、わざわざお返しをするべきではない。(返済)

Ⅲ 結 果

因子分析を行なった結果、箱井たち⁶の調査のように四因子を抽出することができなかった。むしろ最尤法で共通性が0.3を下回るものが、日本で12項目、スウェーデンで16項目発生し、また両国に共有できる因子を作成するに至らなかった。よって、因子間の比較をすることが困難となったため、個々の質問項目を比較することとした。国による差異を明らかにするために、上記の29項目の規範意識に関する回答を従属変数として、*t*検定により有意差検定を行った。

まず有意差が認められなかったのが、表4の通り6項目であった。

表4 有意差の生じなかった項目

質問項目	平均 (回答数)		有意確率
2. 救う能力が自分に備わっていない時には、救う努力をしても無駄である。(逆転項目)	日本	3.593 (376)	0.14
	sw	3.706 (282)	
9. 人を助ける場合、相手からの感謝や返礼を期待してもよい。(逆転項目)	日本	3.518 (371)	0.14
	sw	3.409 (275)	
12. 不当な立場で苦しんでいる人は、少しでも助けるべきだ。	日本	4.013 (376)	0.57
	sw	4.045 (286)	
18. 大勢の人が同じ状況で困っている場合、まず以前私を助けてくれたことのある人を1番最初に助けるべきである。(逆転項目)	日本	3.048 (376)	0.53
	sw	3.094 (288)	
22. 自分が不利になるのなら、困っている人を助けなくともよい。(逆転項目)	日本	3.289 (374)	0.33
	sw	3.353 (283)	
28. 人は自分を助けてくれた人を傷つけるべきではない。	日本	3.803 (375)	0.633
	sw	3.833 (287)	

次に、日本人回答者が有意に高く回答したのが、表5に示す通りの15項目であった。

表5 日本人回答者が有意に高く回答した項目

質問項目	平均 (回答数)		有意確率
4. 自分の利益よりも相手の利益を優先して、手助けすべきである。	日本	2.96 (376)	**
	Sw	2.608 (286)	
5. 人から何かを贈られたら、同じだけお返しをすべきである。	日本	3.428 (376)	**
	Sw	2.861 (287)	
6. 自己を犠牲にしてまでも、人を助ける必要はない。(逆転項目)	日本	2.947 (376)	**
	sw	2.371 (286)	
7. 過去において私を助けてくれた人には、一生感謝の念を持ち続けるべきである。	日本	3.806 (376)	**
	sw	2.569 (283)	
8. しいたげられている人を、まず救うべきだ。(弱者救済)	日本	3.620 (376)	**
	sw	3.394 (287)	
10. 恩人が困っている時には、自分に何があろうと助けるべきである。	日本	3.426 (376)	**
	sw	2.502 (285)	
11. 人にかけてた迷惑は、いかなる犠牲を払って償うべきである。	日本	3.447 (347)	**
	sw	2.888 (287)	
13. 以前、私を助けてくれた人には、特に親切にすべきである。	日本	3.551 (376)	*
	sw	2.571 (287)	
15. 犯した罪を償わなくてもよい場合がある。(逆転項目)	日本	3.472 (376)	**
	sw	3.152 (282)	
16. 人が、私を助けるために何らかの損害を被っているなら、そのことに対し責任を持つべきである。	日本	3.772 (373)	**
	sw	2.933 (285)	
17. 将来付き合うことのない人なら、困っていても助ける必要はない。(逆転項目)	日本	3.811 (376)	**
	sw	3.544 (287)	
20. どんな場合でも、人に迷惑をかけてはいけない。	日本	3.484 (376)	**
	sw	2.357 (286)	
24. 社会の利益よりも、自分の利益を第1に考えるべきである。	日本	3.420 (374)	**
	sw	2.948 (288)	
25. 見返りを期待した援助など、全く価値がない。	日本	3.120 (374)	**
	sw	2.689 (283)	
26. 受けた恩は必ずしも返さなくてもよい。(逆転項目)	日本	3.330 (376)	**
	sw	2.573 (286)	

** $p < .01$, * $p < .05$.

そして、スウェーデン人回答者が有意に高く回答したのが、表6に示すとおり7項目であった。

表6 スウェーデン人回答者が有意に高く回答した項目

質問項目	平均 (回答数)		有意確率
1. 自分に好意を示してくれたからと言って自分も好意を示してお返しをする必要はない (逆転項目)	日本	3.319 (376)	**
	sw	3.558 (285)	
3. 人が困っている時には、自分がどんな状況にあらうとも、助けるべきである。	日本	3.141 (376)	**
	sw	3.706 (287)	
14. 人の好意には甘えてもよい。(逆転項目)	日本	2.424 (375)	*
	sw	2.571 (275)	
19. 困っている人に、自分の持ち物を与えることは当然のことである。	日本	3.048 (376)	**
	sw	3.347 (288)	
21. 私を頼りにしている人には、親切であるべきだ。	日本	3.459 (375)	**
	sw	4.095 (284)	
23. 社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである。	日本	3.691 (375)	**
	sw	3.957 (289)	
27. 自分より悪い境遇の人に与えるのは当然のことである。	日本	3.225 (374)	**
	sw	4.095 (289)	
29. 相手がお返しを期待していないのなら、わざわざお返しをするべきではない。(逆転項目)	日本	3.396 (376)	*
	sw	3.554 (287)	

** $p < .01$, * $p < .05$.

以上の結果は、箱井たちの示した因子の枠を反映するものではなかった。

IV 考 察

以下に、下記の点について述べたい。

- ① 援助意識の構造の比較について
- ② 因子分析結果について

1 援助意識の構造の比較について

全体を概観すると支援をする意思に関する質問に対して、5件法で3未満の回答が無かったため、両国の回答者に支援をすることに否定が無いことが認められる。以下、個々の質問を比較しながら、両国の差異について述べていきたい。そして、差異について考える際に、箱井たちに4つの分類枠⁷に従って述べていく。「返済規範意識」は以前援助してくれた人には、親切にすべきで、傷つけてはいけないという互恵的な規範意識と、人に迷惑をかけた時にはその人に償うべきものであるという補償的な規範意識を含んでいる。「自己犠牲規範意識」は、自己犠牲を含む愛他的行動を指示する規範への意識を表している。「交換規範意識」は、援助に見返りを期待し、自分に有利になるような援助なら援助を行うべきという意識から構成されており、援助を相互交換的にとらえることに対して、肯定的か否定的かを表している。「弱者救済規範意識」は自分より弱い立場、悪い立場、経済的に困っている人びとに対する救済、分与を指示する規範に関する意識を表している。

まず、上記の返済に当たる質問項目から目を向けたい。「人から何かを贈られたら、同じだけ

お返しをすべきである」「過去において私を助けてくれた人には、一生感謝の念を持ち続けるべきである」「受けた恩は必ずしも返さなくてもよい」「人が私を助けるために何らかの損害を被っているなら、そのことに對し責任を持つべきである」「恩人が困っている時には、自分に何があるかと助けるべきである」「人にかけた迷惑は、いかなる犠牲を払っても償うべきである」「以前私を助けてくれた人には、特に親切にすべきである」については、日本人回答者の方が有意に高くなっている。このことは、スウェーデン人回答者が、過去に自分を助けてくれた人に対して感謝すべきであるという意識が弱いことを示している。これは、一般的な助け合い意識が強く、特定の個人に対する謝意といったいわば限定的な意識を弱くなっているということではないか。他方で、「自分に好意を示してくれたからといって、自分も好意を示してお返しをする必要はない。」、「相手がお返しを期待していないのなら、わざわざお返しをするべきではない」ではスウェーデン人回答者が有意に高くなっている。一見同趣旨の質問であるが、これらの回答傾向が反対であることをいかに解釈すべきなのか。一つの解釈として、「自分に好意を示してくれたからといって、自分も好意を示してお返しをする必要はない。」、「相手がお返しを期待していないのなら、わざわざお返しをするべきではない」の質問については支援されたことに對して、「借りがある」といった対等性を失うことを拒否するスウェーデン人回答者の意識があるのではないか。というのは、スウェーデンでは公平性を欠く可能性があるためにボランティア活動が消極的であり⁸、それはボランティアをしてもらうことが、援助されたということで相手に負い目を抱いて対等性を失い、本来の権利を主張できなくなるのではないかと危惧するためであるとされている。公平に権利を享受するために、援助者・被援助者間の対等性を失いたくないという意識が働いているのではないだろうか。

次に自己犠牲に当たる項目に目を移したい。「人が困っている時には、自分がどんな状況にあらうとも、助けるべきである」「自分が不利になるのなら、困っている人を助けなくともよい」(逆転項目)についてはスウェーデン人回答者の方が有意に高くなっている。すなわち、自らが痛みを伴う支援について肯定しているのである。しかし、「自分の利益よりも相手の利益を優先して、手助けすべきである」「自分を犠牲にしてまで人を助ける必要はない」「社会の利益よりも、自分の利益を第一に考えるべきである」(全て逆転項目)では日本人回答者の方が高くなっている。この一見同趣旨の質問に對して反対の回答傾向が示されたことは、どう解釈すべきか。一つの解釈として、スウェーデン人回答者は、基本的に痛みを伴いつつも人を支援することを肯定する傾向が強い、しかし日本人回答者では、自分の権利を前面に押し出して主張することや自己犠牲を否定することを強く拒否を示すということが考えられないだろうか。

そして、次に箱井たちが弱者救済に分類した項目について触れたい。「しいたげられている人を、まず救うべきだ」では、日本人回答者のほうが有意に高く回答されている。しかし、それ以外の項目「不当な立場で苦しんでいる人は、少しでも助けるべきだ」「困っている人に自分の持ち物を与えることは当然のことである」では、スウェーデン人回答者の方が高く回答している。この一見同趣旨の質問に對して反対の回答傾向が示されたことは、どう解釈すべきか。「しいたげられている人を、まず救うべきだ」について、大西たち⁹の調査では、精神保健福祉士の実習前後で、この質問項目に對する回答が有意に減少した事を示している。これより示唆されることは、実習により「まず救う」といった一方的で感情的な感覚から、冷静に虐げられている人に対して状況把握し、全体像をしっかりと踏まえた上で対応していくといった姿勢が培われるという

ことであろう。そのように考えるとスウェーデン人でのこの回答は、感情的・一面的な対応に留まらない、全体像を捉えた冷静な対応をしていくべきであるという姿勢を反映しているのではないか。

最後に、箱井たちが交換に分類した項目について触れたい。「見返りを期待した援助など、全く価値がない」では、日本人回答者の方が高くなっている。この質問は特に違和感はないが、それ以外で、交換に分類された質問項目が果たして意味内容的にそれに属するべきなのか疑問の残るところである。「人の好意には甘えてもよい」(逆転)ではスウェーデン人回答者の方が有意に高くなっている。それに対して「どんな場合でも、人に迷惑をかけてはいけない」は日本人回答者が高くなっている。即ち、スウェーデン人回答者では人の好意に甘えずに自助努力すべきであると考えていると回答する傾向がある。しかし、日本では見返りを期待した援助や人に迷惑をかけるといふことを潔しとしない傾向がある、ということになる。「どんな場合でも、人に迷惑をかけてはいけない」については大西たち¹⁰の調査で、精神保健福祉士の実習前後で、この質問項目に対する回答が有意に減少した事を示している。即ち、生活上の権利を保障するにあたり、周囲に迷惑をかけるように見られるようなことがあるかもしれない。それを過剰に自粛する必要がないという意識が培われるということである。その意味でスウェーデン回答者では、日本人回答者と比較して、自分の権利を獲得するために周囲への過剰な遠慮はする必要がないということが認識されているということではないだろうか。

以上より、次のことが言えるのではないだろうか。

日本人調査対象者の回答傾向として、「人に迷惑をかけてはいけない」、「特定の世話になった人には恩を返さなければならない」という意識が強く働き、自分の利益という主張することや自分を犠牲にするとすることを否定することに抵抗がある。見方によっては、自分で自発的に援助するというよりも、「人がどう思うか」「特定の世話になった人に対する恩を忘れてはならない」を気にして、「人があるべき姿という理想像」に従って行動させられているという感じである。すなわち、人からの世話を受けたことへの返済に力を注ぎ、しかし柔軟性に乏しく他者に委ねることは良くないと考える傾向がある。そして不特定多数の人への救済はスウェーデン人回答者より低くなる、というものである。言ってみれば、前述した家族主義という限られた人間内でのつながりに、意識がとどまってしまう可能性があるというものでないか。

他方でスウェーデン人回答者では、不特定多数の人への博愛性強く、相手の好意は、淡々と返そうとする。そして他者に安易に甘えてはいけないと考えつつも、本当に自分たちが困っているのであればゆだねることも許容するという柔軟性が認められる。援助する者、される者の関係の対等性を重視する。また援助によるメリットがあることも否定しない、というものである。自分も本当に困れば援助してもらおうが、それをまた援助を必要としている不特定多数の人々に平等に自分も援助していこうという循環が伺われる。

2 因子分析結果に関して

因子分析では数値的なまとまりと意味的なまとまりが注目され、それによりあるまとまりが他のまとまりとの区別ができることになる¹¹。このまとまりとは調査を行った回答者にとって、同じ傾向の回答をする質問のまとまりとして考えることができる。先行研究を見てみると、箱井たちは自分たちの調査項目を設定する際に、「苦境への援助」「恩」「援助の厳格さ」「不干渉」「博愛

性」を提示した松井・堀¹²の調査を参考をしている。確かに前述したように交換に分類した項目の中で、「人の好意には甘えてもよい。」「どんな場合でも、人に迷惑をかけてはいけない」は、理論的・内容的には援助されることの適切性を問う「援助の厳格さ」に該当する質問かもしれない。他方で、中国において行った調査で、箱井たちの調査項目を用いて、交換規範意識を除く三因子を抽出している¹³。因子分析により、箱井たちの提示した四因子は抽出できなかった。これは日本人回答者を対象としても分類できず、またスウェーデン人回答者においても同様であった。確かに本調査で用いた調査票は尺度項目の内的一貫性と構成概念妥当性を兼ね備えた尺度であるとの評価がある¹⁴。しかし以上の因子分析に課題を見ていると、内容の整合性については今後とも調査の積み重ねにより検討していくことが求められよう。

前述したように、本稿の目的は福祉の政策を支える国民の意識構造を見ることにあった。日本人の美德を振り返ろうという動き¹⁵が昨今見られるが、確かに日本は決してやさしさや思いやりが無い国ではないだろう。しかしその構造が、ともすると福祉を国家の使命として行なうというねりを作り上げることの支障になってしまう可能性がある。スウェーデンが不特定多数の人に対して、痛みを伴っても援助する意思を示し、ただし自分たちも努力はするが自分でいかんともしがたいときは、助けてもらうことに大きな抵抗は無い。また自分のした援助がどこかで帰ってくることを期待して、それを恥ずかしいと思わない。そこにスウェーデンの福祉国家形成に向けてのサイクルが展開しうる。それに対して、日本では、特定の人たちとの関係に強く目が向けられ、恩は返すというところに力点が置かれ、不特定多数の人に目は向きにくい。また自己犠牲を美德とし、他者への迷惑をかけてはいけないという規制が働く。そこでは、権利を保障する福祉政策の循環は本質的なところで停滞してしまうのではないか。この自己犠牲の美化は藤原¹⁶が現在でも日本に残っているという「自分のためよりも公のためにつくすことの美感」と共通するものと言えないだろうか。本調査では福祉施設職員・教員を調査対象としている。そのような権利の意識獲得を積極的に推進すべき立場の人々からこのように回答を得たことは極めて象徴的であるように思われる。

V おわりに

本稿では、日本とスウェーデンの福祉国家の前提となる国民の意識について比較研究を行なった。法制度や政策を皮相的に捉えるのではなく、国民の援助規範意識の構造を認識する必要性について述べた。決して日本では援助意識が無いのではなく、意識の構造が異なるのである。ただし、その構造の差異を認識することがきわめて重要な出発点となると考えられる。それが両国の福祉への取り組みを極めて如実に象徴しているように思われる。

本稿では日本とスウェーデン人回答者の援助規範意識の表れ方について比較調査を行った。しかし、それぞれの国で援助規範の継承と年代による差異については明確にすることができなかった。今後の研究により明らかにされるべき課題であろう。

文 献

- 1 エスピン・アンデルセン (2001)『福祉資本主義の三つの世界』岡沢憲美・宮本太郎監訳 ミネルヴァ書房
- 2 埋橋孝文 (2001)『福祉政策の国際的動向と日本の選択』法律文化社 p.4
- 3 渡辺雅男 (2004)「福祉資本主義の危機と家族主義の未来」経済理論学会編『季刊経済理論』第 41 巻 第 2 号 p.8
- 4 宮本太郎 (2008)『福祉政治』有斐閣 iv
- 5 箱井英寿・高木修 (1987)「援助規範意識の性別、年代、および、世代間の比較」『社会心理学研究』3(1) pp.39-47
- 6 前掲 5 pp.39-47
- 7 前掲 5 pp.39-47
- 8 奥村芳孝 (2005)『スウェーデンの高齢者・障害者ケア入門』筒井書房 p.78
- 9 大西良他 「精神保健福祉援助実習における実習生の援助観の遷移」『久留米大学健康スポーツ科学紀要』15 久留米大学 p.54
- 10 前掲 9 p.54
- 11 浦上昌則・脇田貴文『調査系論文の読み方』東京図書 p.94
- 12 松井豊・堀洋道 (1978)「大学生の援助に関する規範意識の検討 (1)」『日本心理学会第 42 回大会発表論文集』 pp.1298-1299
- 13 薛迪 (2010)「中国の大学生に見る援助規範意識の特性とその規範要因」『proceeding』12 御茶ノ水女子大学 pp.73-80
- 14 吉田富二雄編 (2009)『心理測定尺度集 II』堀洋道監修 サイエンス社 p.184
- 15 藤原正彦 (2010)『国家の品格』文春文庫
- 16 藤原正彦 (2011)『日本人の誇り』文春文庫 p.237